

自閉症・情緒障害特別支援学級における 自立活動の指導について

－付けたい力の習得・定着を図り，活用を目指す指導ステップの提案－

和歌山市立楠見小学校
教諭 西本広樹

【要旨】

本研究では，自立活動の指導で児童が身に付けた力を各教科等の時間で活用できることをねらい，付けたい力の習得・定着を図り，活用を目指す3つの指導ステップを提案する。

提案授業では，平成30年特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編で新たに示された「流れ図」を用いて，児童の実態から課題を整理し，指導目標や指導内容を設定した。具体的な指導内容としてスケジュールを用いた学習を取り入れ，付けたい力の習得・定着，活用を目指す指導を行った。設定した指導目標・指導内容及び3つの指導ステップの成果と課題について考察し，継続的・発展的な指導の有効性を見出すことができた。

【キーワード】

自閉症・情緒障害特別支援学級，自立活動，3つの指導ステップ(習得・定着，活用)，流れ図，スケジュールを用いた学習

1 研究のねらい

(1) 特別支援学級の現状

近年，義務教育段階の児童生徒数は減少傾向にあるにも関わらず，特別支援学級の在籍児童生徒数は増加傾向にあり，平成21年度から令和元年度にかけて2.1倍になっている(※1)。特に，自閉症・情緒障害特別支援学級の在籍児童生徒数の増加が著しく，約2.7倍になっている(図1)。一方で，教員の大量退職等によりベテラン教員の人数が減少傾向にあり，経験年数の浅い若手教員が特別支援学級を担任することが多くなっている。

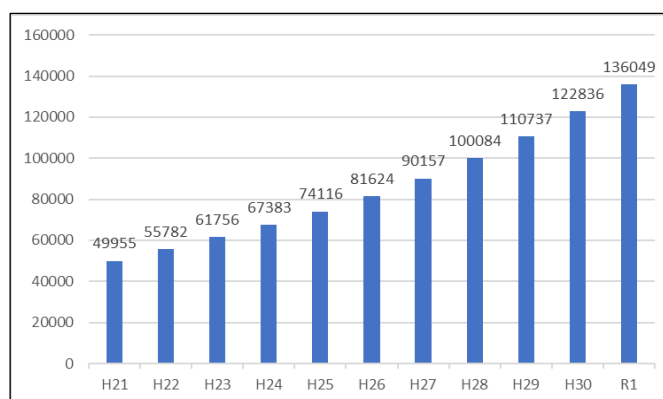


図1 自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する児童生徒数の推移(注1)

平成29年小学校学習指導要領では，特別支援学級において自立活動の指導を取り入れることが規定され，その指導に当たっては，「児童一人一人に個別の指導計画を作成し，それに基づいて指導を展開する必要がある。」(※2)と示されている。柳澤ら(2016)は，経験年数が浅い特別支援学級担当教員に対して情報収集を行い，自立活動の指導内容の設定や指導方法の困難等，自立活動の指導上の課題を挙げている。さらに，「自閉症のある子どもが，通常の学級の子どもと共に学び合う機会を保障していくために，また，教科等の学習を支えていくためには自立活動の指導は不可欠であり，特別支援学級の担任の自立活動の重要性に対する意識と専門性の向上が求められる。」(※3)と述べている。

(2) 自身の実践における課題

筆者は昨年度，初めて自閉症・情緒障害特別支援学級を担任した。前担任から引き継い

だ情報を基に、管理職や主任教諭等に相談しながら、児童の実態把握、障害特性の理解、指導内容や指導方法の工夫等を行い、各教科等や自立活動の指導に取り組んできた。

所属校での自身の実践を振り返ると、主に課題が2つ見えてきた。

1つ目は、自立活動の指導を行う上で実態把握・指導目標や指導内容の設定等の一連の流れについての理解が十分でなかったため、個々の児童の課題に応じた細やかな指導にまで至ることができなかったことである。

2つ目は、児童が自立活動で身に付けた力を各教科等の学習や生活場面で活用できるよう、計画的な指導が行えていなかったことである。柳澤ら(2016)は、自閉症のある児童には、学習したことを般化(注2)することに難しさがあるため、指導・支援を行う上で重要な点の一つとして、指導者や指導場面を多様にする必要性を示唆している。このことから、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する児童には、学習して身に付けた力を様々な場面で活用できるように意図的に指導することが大切であると考えられる。

以上のことから、付けた力の習得・定着を図り、活用を目指す自立活動の指導ステップの提案を本研究の主題とし、筆者の課題を解決するとともに、本県で特別支援学級を担当している教員、とりわけ筆者と同様に経験年数の浅い担当者にその成果を還元していくことを研究のねらいとした。

2 研究の方法

(1) 流れ図による指導すべき課題の明確化、指導目標・指導内容の設定

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編(以下、自立活動編と略記)では、「自立活動の指導に当たっては、個々の児童又は生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等の的確な把握に基づき、指導すべき課題を明確にすることによって、指導目標及び指導内容を設定し、個別の指導計画を作成するものとする。」(※4)とある。

また、自立活動編の改訂において、個別の指導計画作成手順の一例として、新たに「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例(流れ図)(図2)(※5)」が示された。さらに、この流れ図を用いて、どのような観点で整理していくか、図2の①～⑧の各段階における考え方についても述べられている。

本研究では、この流れ図の作成を通して、児童の実態把握から、指導すべき課題を整理して明確化し、指導目標(長期目標・短期目標)及び具体的な指導内容を設定する。

さらに、自立活動編で示されている具体的な指導内容を設定する際の配慮事項(注3)の中から「ア 主体的に取り組む指導内容」や「オ 自ら環境を整える指導内容」、「カ 自己選択・自己決定を促す指導内容」に留意し、提案授業に取り入れていく。



図2 実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例(流れ図)

(2) 付けたい力の習得・定着を図り、活用を目指す指導ステップについて

特別支援学校学習指導要領解説各教科等編では、知的障害のある児童生徒の学習上の特性として「学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場面の中で生かすことが難しい」(※6)とし、「実際の生活場面に即しながら、繰り返して学習することにより、必要な知識や技能等を身に付けられるようにする継続的、段階的な指導が重要となる。」(※7)と述べられている。このことは、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する児童生徒にも当てはまると考えられる。

さらに、前述の柳澤ら(2016)が般化の困難さを取り上げているのと同様に、佐々木(2010)も、自閉症のある子供は環境の変化に敏感で、場所や状況が変わると不安になり緊張してしまうことや、教わったことを場所と行動を結び付けて身に付けるため、他の場面での活用が難しく、様々な状況で練習する必要があることを述べている(※8)。

これらのことから、自立活動の指導で身に付けた力を他の場面で活用できるようにするためには、付けたい力の習得に加え、継続的・段階的な指導で習得を確かなものにする定着を図り、さらに習得・定着した力を自立活動の時間だけでなく、各教科等の学習や生活場面において活用できることを目指すといった3つの指導ステップが有効ではないかと考えた(図3)。

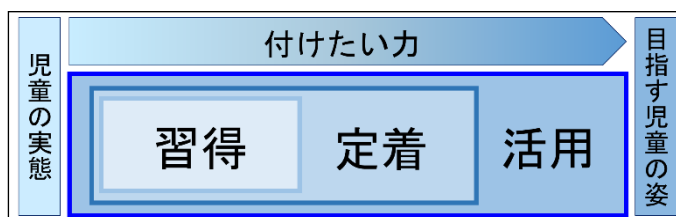


図3 習得・定着、活用の3つの指導ステップ

3 所属校における授業研究

本研究では、所属校の自閉症・情緒障害特別支援学級において、自立活動の時間と「学力向上タイム」である15分間のモジュール学習において、3つの指導ステップで構成した授業研究に取り組んだ。

(1) 指導目標・指導内容の設定について

まず、現担任が作成した個別の指導計画や、学習や生活の様子を実際に観察して得た情報等から児童の実態を把握した。それを基に、流れ図を用いて長期及び短期の指導目標を設定した(注4)。

次に、指導目標を達成するために、自立活動の内容6区分27項目(表1)(注5)の中から必要な項目を選定し関連付け、指導内容を設定した。

表1 自立活動の内容6区分27項目

1 健康の保持	2 心理的な安定	3 人間関係の形成
(1)生活リズムや生活習慣の形成に関する事。 (2)病気の状態の理解と生活管理に関する事。 (3)身体各部の状態の理解と養護に関する事。 (4)障害の特性の理解と生活環境の調整に関する事。 (5)健康状態の維持・改善に関する事。	(1)情緒の安定に関する事。 (2)状況の理解と変化への対応に関する事。 (3)障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関する事。	(1)他者とのかかわりの基礎に関する事。 (2)他者の意図や感情の理解に関する事。 (3)自己の理解と行動の調整に関する事。 (4)集団への参加の基礎に関する事。
4 環境の把握	5 身体の動き	6 コミュニケーション
(1)保有する感覚の活用に関する事。 (2)感覚や認知の特性についての理解と対応に関する事。 (3)感覚の補助及び代行手段の活用に関する事。 (4)感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関する事。 (5)認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関する事。	(1)姿勢と運動・動作の基本的技能に関する事。 (2)姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関する事。 (3)日常生活に必要な基本動作に関する事。 (4)身体の移動能力に関する事。 (5)作業に必要な動作と円滑な遂行に関する事。	(1)コミュニケーションの基礎的能力に関する事。 (2)言語の受容と表出に関する事。 (3)言語の形成と活用に関する事。 (4)コミュニケーション手段の選択と活用に関する事。 (5)状況に応じたコミュニケーションに関する事。

具体的な指導内容については、自立活動の内容「心理的な安定」(1),(2),(3)と「人間関係の形成」(3),「環境の把握」(5),「コミュニケーション」(1)を関連させ、スケジュールを用いた学習を取り入れることとした。スケジュールを用いることで、事前に活動内容や順番がわかり、学習の見通しがもてたり、心の準備ができ、落ち着いて学習に取り組めたりすると考えたからである。ホワイトボードに、活動内容のカードを貼り、活動が終わるとカードを外して、下のケースに入れるスケジュールボードを用意した(図4)。



図4 スケジュールの例

(2) 3つの指導ステップの実践について

今年度、水・木曜日に各1時間設定されている自立活動の時間と、月曜日から金曜日の15分間のモジュール学習(以下、所属校での呼称「学びっこタイム」と表記)の時間を関連させて、習得・定着、活用の3つの指導ステップの実践計画(表2)を作成し、取り組んだ。

表2 3つの指導ステップの実践計画

ステップ1(習得)				ステップ2(定着)					ステップ3(活用)				
自立活動の時間における指導 教師が設定したスケジュールに沿って、活動に取り組む。				自立活動の時間における指導 児童が自ら活動内容の順番を決め、設定したスケジュールに沿って活動に取り組む。					自立活動の時間における指導 児童が自ら活動内容と順番を決め、設定したスケジュールに沿って活動に取り組む。				
学びっこタイム(自立活動の時間) 教師が設定したスケジュールに沿って、活動に取り組む。				学びっこタイム(各教科等の時間) 児童が自ら国語・算数の学習課題の順番を設定したスケジュールに沿って課題に取り組む。 必要に応じて教師による直接支援を受ける。					学びっこタイム(各教科等の時間) 児童が自ら国語・算数の学習課題と順番を決め、設定したスケジュールに沿って課題に取り組む。				
木	金	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金	月	水
J①	-	-	-	J②	J③	-	-	-	J④	J⑤	-	-	J⑥
M①	M②	M③	M④	M⑤	M⑥	M⑦	M⑧	M⑨	M⑩	M⑪	M⑫	M⑬	M⑭

J…自立活動の時間における指導 M…学びっこタイム

※ステップ3の火曜日は祝日

ステップ1は、習得の段階である。この段階では、学びっこタイムも自立活動の時間と位置づけ、教師が設定したスケジュールに沿って活動に取り組む力を習得することを目的とした。活動内容は、児童が興味・関心のあるぬり絵や折り紙、算数や国語の簡単な学習課題等の個別に取り組む活動と、ボール運びやかかるた等の他者と協働して取り組むゲーム活動とした。

ステップ2は、定着の段階である。この段階では、自立活動の時間において児童が自ら活動内容の順番を決め、設定したスケジュールに沿って取り組み、ステップ1で習得した力の定着を図ることを目的とした。また、学びっこタイムを算数や国語の各教科等の時間と位置づけて、児童個々の習熟度に応じた学習課題を3つ設定した。その場面でも、児童が自ら活動内容の順番を決め、設定したスケジュールに沿って取り組む力を活用することにより、確かな定着を図ることを目的とした。その際には、学習課題を達成できるように必要に応じて教師による直接支援を行った。

ステップ3は、活用の段階である。この段階では、習得・定着した力を活用できるように、児童が自ら活動内容と順番を決め、設定したスケジュールに沿って取り組むようにした。学びっこタイムの時間も児童が同様のスケジュール設定を行い、学習課題に取り組んだ。

3つの指導ステップを通して、自立活動の時間では児童が活動に取り組む意欲を喚起するために、実践計画を作成する際に、児童から興味・関心のある活動について聞き取りを

行い、毎時の活動終了後に「お楽しみ活動」の時間を設定した。また、授業の最後に振り返りシートを書く時間を設けることとした。振り返りシートは、「スケジュールに沿って学習に取り組めたか」「活動に集中して取り組めたか」「決められた時間、活動に取り組めたか」の項目について、「よくできた」、「できた」、「できなかった」を表す3種類の表情マークから児童が自身の取り組み状況を振り返って選択したり、授業の感想を書いたりして自己評価できる構成とした(図5)。

(3) 指導の実際

指導の実際として、表2のJ④時(ステップ3の自立活動の時間)について述べる。この時間は、児童にぬり絵、折り紙、算数プリント、漢字プリントの4つの活動を提示した。児童はそれらの中から、「算数プリント」「ぬり絵」「折り紙」の3つの活動を自ら選択し、スケジュールを作成した(図6)。楽しく取り組めそうな活動をモチベーションにして、①に設定した算数プリントを頑張ろうとした様子が見て取れる。

「お楽しみ活動」では、「段ボール工作」を行い、その際には、教師も児童と一緒に活動に取り組む、楽しい雰囲気づくりを心掛けた。

授業の最後には「ふりかえり」として、スケジュールを自ら設定し、それに沿って活動に取り組んでいたことについて筆者が評価した。

児童はその日の「ふりかえりシート」で、「活動に集中して取り組めたか」の項目において「よくできた」を表す表情マークを選んでいった。また、活動の中で楽しいと感じたこととして、「ぬり絵」や「折り紙」、「お楽しみ活動」等を挙げ、言葉と絵で表現していた。

自立活動 ふりかえりシート			
スケジュールにそって、活動にとりくめましたか			
活動に集中してとりくめましたか			
決められた時間、活動にとりくめましたか			
※今日の活動で思ったこと(楽しかったことや難しかったことなど)を書いてみよう。			

図5 ふりかえりシート

提示した4つの活動	児童が設定したスケジュール	
ぬり絵	① 算数プリント3まい	8分
折り紙	② ぬり絵	8分
算数プリント3まい	③ 折り紙	8分
漢字プリント3まい	④ お楽しみ活動	10分
	⑤ ふりかえり	5分

※スケジュールに記載は無いが、活動前に5分程度、本時のめあてを確認する時間がある。

図6 J④時で児童が作成したスケジュール

4 成果と課題

(1) 指導目標・指導内容の設定について

本研究では流れ図を用いたことで、よりスムーズに児童の課題を整理でき、実態に合った指導目標を設定できたと考える。指導内容については、自立活動の内容6区分27項目を関連付けたことで、児童個々の目標達成に向け、スケジュールを用いた学習を取り入れた。このことは、「個々の児童の課題に応じた細やかな指導にまで至ることができなかった」という筆者の課題の改善に繋がったと考える。また、スケジュールを用いた学習は、「手続き的な記憶」(注6)を得意とする児童の長所を生かすことができた。

さらに、提案授業を実践するに当たり、作成した流れ図を現担任と共有したことで、児童の実態や指導の方向性について円滑に共通理解を図ることができたと考える。

(2) 3つの指導ステップの実践について

本研究で取り組んだ3つの指導ステップの各ステップにおける成果について述べる。

ステップ1(習得)では、児童はスケジュールに沿って活動に取り組むことができた。それは、スケジュールを視覚的に提示したことで学習の見通しがもてるようになったことや、学習課題を達成しやすいように難易度を考慮したこと等が有効であったためと考えられる。

ステップ2(定着)では、児童が自ら活動の順番を決め、状況によっては支援を受けることもあったが、設定したスケジュールに沿って活動に取り組むことができた。活動の順

番を自ら決める行為により、児童の意欲が向上し、主体的に取り組む姿が見られた。このことから、付けたい力の定着に繋がったと考える。

ステップ3（活用）では、活動の順番を決めるだけでなく、取り組む活動を選択することもできていた。学びっこタイムでの算数や国語の学習課題の中で難しい問題も直接支援をしなくても、自身で考えたり国語辞典や漢字辞典で調べたりして取り組む様子が見られた。スケジュールを用いたことで集中力や意欲が維持でき、身に付けた力を活用することができたと考える。

習得・定着、活用の3つの指導ステップに基づいて自立活動の指導を行ったことにより、児童はステップ2、3の学びっこタイムでも身に付けた力を活用し、算数や国語の学習課題に取り組むことができていた。活用できたことにより、児童の学習意欲が向上し、各教科等での目標を達成することにも効果が波及した。このことから、自立活動の指導が各教科等で育成すべき資質・能力を支える役割を担っており、各教科等の指導においても自立活動の指導と密接な関連を図って行うことの重要性が確認できた。

本研究では、2(1)で述べたように、自立活動編で示されている配慮事項のうち「ア 主体的に取り組む指導内容」や「オ 自ら環境を整える指導内容」、「カ 自己選択・自己決定を促す指導内容」の3点について留意して具体的な指導内容の設定を行った。この観点からの成果についても述べる。

「ア 主体的に取り組む指導内容」については、3つの指導ステップで段階的に支援を少なくしたことや、ぬり絵、折り紙など児童の興味・関心のある活動を取り入れたこと、振り返りの際に振り返りシートによる自己評価を行ったことで、児童は主体性や意欲を高めていくことができたと考える。また、「オ 自ら環境を整える指導内容」、「カ 自己選択・自己決定を促す指導内容」については、児童自らスケジュールのカードを操作したり、取り組む活動内容と順番を決めたりするという自己選択・自己決定の機会を授業に意図的に仕組むことで、ステップ3まで学習を積み重ねていくと、児童自身で学習を進めることができるようになっていたと考える。

課題として2点述べる。

1点目は、指導目標・指導内容の妥当性の検討である。設定した指導目標が児童にとって難しすぎたり、易しすぎたりすると児童の学習意欲を削いでしまう可能性も考えられる。また、指導内容もその時の児童の状態や周囲の環境に配慮しながら児童の実態に即したものにすることが必要である。児童が少し頑張ればできるというレベルの指導目標・指導内容を達成することで、児童は自己肯定感や成就感を得られると考える。本研究では、児童の指導目標・指導内容の達成状況を常に評価し、それらの妥当性について検討し、改善するまでには至らなかった。自立活動の指導に当たっては、指導目標・指導内容はPDCAサイクルの視点で児童の実態に応じたものとなるよう常に改善していく必要があると考える。

2点目は、活用場面の充実である。本研究では、身に付けた力の活用場面として学びっこタイムでの指導を設定したが、学びっこタイムは短時間のモジュール学習である。身に付けた力の活用をより確かなものにするためには、各教科等の学習場面において十分な活用機会を設け、継続的・発展的に指導することが必要であると考えられる。

5 今後に向けて

中央教育審議会答申(2016)の中で、以下の2点が本研究で提案した指導ステップと関連があると着目した。

1点目は、「各教科等で育まれた力を、当該教科等における文脈以外の、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力に更に育てたり、教科等横断的に育む資質・能力の育成につなげたりしていくためには、学んだことを、教科等の枠を越えて活用していく場面が必要となり、そうした学びを実現する教育課程全体の枠組みが必要になる。」(※9)である。

2点目は、「基礎的・基本的な知識・技能の習得に課題が見られる場合には、それを身に付けさせるために、子供の学びを深めたり主体性を引き出したりといった工夫を重ねなが

ら、確実な習得を図ることが求められる。」(※10)である。これらは、活用することの重要性、確実な習得・定着の必要性を示唆していると考えられる。本研究では、自閉症・情緒障害特別支援学級において、児童に付けたい力の習得・定着を図り、活用を目指す3つの指導ステップで構成した実践計画に基づいて授業実践を行った。引き続き、各教科等の学習の時間や生活場面等への接続を見据え、3つの指導ステップを踏まえて継続的・発展的に自立活動の指導に取り組んでいきたい。

また、自立活動編では、自立活動の指導は学校の教育活動全体を通じて行うものであり、自立活動の時間における指導だけでなく、各教科等の指導を通じても適切に行わなければならないとしている。さらに、「専門的な知識や技能を有する教師を中心として、全教師の協力の下に効果的に行われるようにするものとする。」(※11)と示されている。本研究では、現担任と児童の実態を共有しながら、流れ図を用いて指導目標・指導内容を設定した。今後は流れ図や個別の指導計画を特別支援学級の担任だけでなく、特別支援教育コーディネーター、通級指導教室担当者、交流学級担任、養護教諭、管理職等と協働して作成することで、児童の実態に即したより良い自立活動の指導ができるようにしていきたい。

<注釈>

注1 文部科学省「特別支援教育資料」の平成21年度～令和元年度までのデータを基に筆者がグラフを作成。

注2 ある特定の場面での行動が強化(消去)されたために、別の場面でもその行動をする(やめる)ようになること。

注3 具体的な指導内容を設定する際には、以下の点を考慮することとして7点示されている。

ア 主体的に取り組む指導内容

イ 改善・克服の意欲を喚起する指導内容

ウ 発達の進んでいる側面を更に伸ばすような指導内容

エ 自ら環境と関わり合う指導内容(幼稚園)

オ 自ら環境を整える指導内容(小学部・中学部)

カ 自己選択・自己決定を促す指導内容

キ 自立活動を学ぶことの意義について考えさせるような指導内容

注4 自立活動編で示されている流れ図には、⑤指導目標を記す段階に長期目標と短期目標の区別はないが、本研究では和歌山県教育センター学びの丘「初めて特別支援学級を担当する先生のための自立活動の指導」(2020)での「流れ図参考例」を参考にし、長期目標と短期目標を設定した。

注5 自立活動の内容は、人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素と、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するために必要な要素6区分27項目で構成されている。

注6 行動の順番や作業の仕方などの技能を習得するために、その操作の仕方を規則的に機械的に学習し獲得する記憶を「手続き的な記憶」と言う。

<引用文献>

※1 文部科学省初等中等教育局特別支援教育科「特別支援教育の現状と課題について」p.6(2019)

※2 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編』東洋館出版社 p.109(2018)

※3 柳澤亜希子・岡本邦広・石坂務・若林上総・金子道子・荒谷美巳『専門研究B 特別支援学級に在籍する自閉症のある児童生徒の自立活動の指導に関する研究(平成26年度～27年度)研究成果報告書』独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 p.7(2016)

※4 文部科学省『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編(幼稚園・小学部・中学部)』開隆堂 p.104(2018)

※5 同上資料 p.28

※6 文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学部・中学部)』開隆堂 p.26(2018)

※7 同上資料 p.26

※8 佐々木正美『自閉症のすべてがわかる本』講談社(2006) p.77, p.82

※9 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」 p.32(2016)

※10 同上資料 p. 53

※11 文部科学省『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編(幼稚部・小学部・中学部)』開隆堂 p. 123(2018)

<参考文献>

- ・岩手県立総合教育センター特別支援教育室「問題行動の軽減の方法」(2007)
- ・榊原洋一『図解よくわかる自閉症』ナツメ社(2008)
- ・佐々木正美『自閉症のすべてがわかる本』講談社(2006)
- ・武田鉄郎『発達障害の子どもの「できる」を増やす提案・交渉型アプローチ』学研プラス(2017)
- ・徳永豊・木村宣考・齋藤宇開・内田俊行・小澤至賢・涌井恵・柳澤亜希子「特別支援学校における自閉症の特性に応じた指導パッケージの開発研究ー総合的アセスメント方法及びキーポイントとなる指導内容の特定を中心にー」独立行政法人国立特別支援教育総合研究所(2008)
- ・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所『自閉症教育実践ガイドブック 今の充実と明日への展望』ジヤース教育新社(2018)
- ・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所『自閉症教育実践マスターブック キーポイントが未来をひらく』ジヤース教育新社(2016)
- ・坂東啓資・和田伸敏「特別支援学級の現状と支援の在り方についての一考察」和歌山県教育センター学びの丘『平成28年度研究紀要』(2017)
- ・Paul A. Albert & Anne C. Troutman (佐久間徹・谷晋二・大野裕史訳)『はじめての応用行動分析』二瓶社(2004)
- ・文部科学省『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編(幼稚部・小学部・中学部)』開隆堂(2018)
- ・文部科学省初等中等教育局特別支援教育課「特別支援教育の現状と課題について」(2019)
- ・柳澤亜希子・岡本邦広・石坂務・若林上総・金子道子・荒谷美巳『専門研究B 特別支援学級に在籍する自閉症のある児童生徒の自立活動の指導に関する研究(平成26年度~27年度)研究成果報告書』独立行政法人国立特別支援教育総合研究所(2016)
- ・和歌山県教育センター学びの丘「初めて特別支援学級を担当する先生のための自立活動の指導」(2020)
- ・和歌山県教育センター学びの丘「初めて特別支援学級を担当する先生のためのスタートガイド」(2020)